



目次	頁
・ 信徒の証し『希望に生きる』……………小畑孝子	1
・ 「不可能の可能性」を信じて「考動」する(交換講壇で考えたこと)……………中屋重正	2
・ 日野原重明先生との出会いに感謝して……………及川忠人	3
・ 『教会が大好き!』～小畑義宣さん(よっちゃん)に聴く～……………インタビュー	5
・ 2012年度教団新生会大会に参加して……………神谷一夫	6
・ — 中原牧師のブレイクタイム — セ夕に思うこと……………中原眞澄	7

信徒の証し『希望に生きる』

小畑孝子



私たちは、この世に生を受けて、親、兄弟姉妹、そして師や友人などの出会いによって人間関係を保ち、生活しています。しかし、そのような様々な出会いの中でも、私自身にとっては、私を発見してくださった主イエス様との出会いが一番素晴らしい出会いであったように思います。

私がバプテスマを受けた(受浸)のは、1952年8月3日のことで、今年で60年を経たところです。その間には、信仰の危機もありましたが、今日まで信仰を持続できたことは、ただ、感謝の一言に尽きます。礼拝に出席し、聖書に親しみ、祈りの輪に加えられていることで、やっと小さな信仰を維持できているように思われ、天に召されるまで、否、召された後もキリストにつながっていきたくないと望んでいます。

さて、本朝の私の証しは、去る5月20日の主日礼拝において中原牧師のメッセージから受けた感動を軸にしたものです。

5月20日の中原牧師のメッセージは、一昨年同日、天に帰られた奥様よし子さんに関するものでした。よしさんが残された小詩は、週報の「断想(きれぎれ)」にも紹介されましたが、一見単純な表現の中に、深遠で切実な祈りがあり、読む者を感動させました。何と、よしさんは、「難病の試練を取り去ってください。」とは語らず、「試練に耐える力を与えてください。お願いします。」と語られているのです。召天の一週間前にも、よしさんは、中原

牧師に「できることをやっていく限り、夢も希望もある。そのことを皆にも伝えて。」と語られたということです。不治の難病を試練として生きることによって、人間として生きる意味、尊さを見出され、また、伴侶であった先生の献身的な愛や近親者や世人の愛にも触れる中で生きる喜びをはっきりと悟っておられたようです。短い余生の1日1日を精一杯、真剣に生きたよしさんの姿に触れて、私は、つくづく「障がい」ということについて考えさせられました。私たちは、心や身体の一部に「障がい」がある人を、つい「障がい者」と一括りに呼んでしまいがちですが、本来は、「目に障がいがある方」とか「手足に障がいがある方」「知的に障がいがある方」などと限定的に表現するべきではないでしょうか。なぜならば、100%の障がい者などは存在しませんし、逆に100パーセントの健常者というのもあり得ないからです。健康を自負する人々であっても何の病気もない人はなく、仮にそうであったとしても、精神的、性格的に完全な人間はいないはずで、聖書に「正しい人はひとりもいない。」と宣言されているとおりです。

本日、司会者に朗読していただいたコリントの信徒への手紙一10章13節には、「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられなかったものはなかったはずで」と記されています。この部分は、口語訳では、「あなたがたの遭った試練の中で世の常でないものはない」とされており、私には、どちらかという、この口語訳のほうが心に響きます。つまり、人間が人間として生きている間に試練や障が

いがあるのは当然のことで、誰も避けることはできない、「世の常」だということです。実際のところ、私たちは、自分の身にふりかかってきた障がいや試練に驚き悲しみ、早くそれらの試練が取り除かれることを願わずにはいられないものです。また、それらは決して簡単に解消するものでもありません。しかし、大切なことは、いかにこれらの試練や障がいに対応するかということでしょう。身の不幸を嘆き、夢や希望を失いそうになるときこそ、私たちキリスト者は、心の目を転じて、「試みがあるのは世の常」という御言葉を受け入れたいと思うのです。生きることは、楽しむことだけでなく、苦しむことも当然あるべきだと覚悟し、多くの苦しみや悲しみを経験する中でこそ、人生の深い意味を知るものとさせていただくことができるのだと思います。

私自身、知的障がいを持つ子の親として歩んできました。長男・義宣が4歳になっても他の子のように話をしないことに気づいたとき、私たちは、愕然とし、途方にくれたものです。本当に光のない暗い毎日、礼拝に出席することすら億劫に感じられたものです。しかし、聖書の御言葉や周囲の方々の助言、それに何よりも息子自身の優しい微笑みに励まされながら、親としてできることをしていこう、義宣の残された力を育てていこうと決心して、その後の歩みを続けてきました。義宣は、今でも障がいは抱えています。人格においては、最も教会を愛し、教会の人々を愛し、神様からも愛されている「最も恵まれた存在」として成長を遂げることができたことを確信しています。

先ほどの、コリントの信徒への手紙一 10 章 13 節後半には「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練とともに、それに耐えられるよう逃れる道をも備えていてくださいます」と述べられています。真実の神は、私たちに「耐えられない試練に遭わせるこ

とはない。」と約束されておられます。真実の神さまは、人間の弱さを思いやり、逃れる道やうち勝つ方策を備えてくださるということです。私たちは、真実の神さまのみもとに在る人生において、試練、障がいは、すべて耐えられる範囲内であることを体験させられております。何とありがたいことでしょうか。あらためて、天に召されるまで「私には、夢も希望もある。」と言われたよし子さんの姿に打たれる思いです。

マルチン・ルターは、「明日、世界が滅びようとも、私は、きょうリンゴの木を植えよう。」という有名な言葉を残しましたが、実に強い希望を表した言葉ではないでしょうか。私たちは、平和と神の愛が満ちている御国が実現するという主イエス様の約束を信じて、希望を新たに信仰の道を歩んでまいりたいと思います。(この証しは、6月17日の礼拝で語られたものです。)



星野富弘 作品より

「不可能の可能性」を信じて「考動」する

(交換講壇で考えたこと)

中屋 重正

前年度の「交換講壇」の際、青山町教会の若林俊郎牧師が「不可能の可能性」と題して説教して下さいました。

使信(メッセージ)の冒頭で、「御言葉を聞いたなら、『行動』ではなく『考動』、即ち、御業に習って、

考えて行動してほしい」旨のお話があった。私は姿勢を正された思いがした。

御言葉は「マルコによる福音書 16 章 1～8 節、復活する」であったが、その前章に登場する「アリマタヤ出身のヨセフ」についてのお話から始まった。

不勉強の私には初めて注目させられた「登場人物」でハッとした。「マグダラのマリア」については心に残っていたが、……。ヨセフはどの福音書にも登場していたのに、今まで「読めども読めず、…」であった。ヨセフは、弟子達とは立場は違っていたが、同じく「神の国を待ち望んでいた」人であった。

ヨセフにとっては「イエスの死刑」は回避したくとも回避することが「不可能」であったが、「勇氣を出して」（自分が出来ることをしようと考へて）「願ひ出て」許可されると、新しく買った亜麻布でイエスの遺体を巻き、自分のお墓に納めた。この一部始終をマリア達が見ていた。

安息日が終わると（自分たちが出来ることをしようと考へて）直ぐにご遺体を清めるために香料を買ったマリア達は（入り口に大きな石が置かれたことを見て知っていたから）自分たちだけでは「あの石を転がして」願ひ通りに「行動」することが可能かどうかを話し合っていた。

ところが「イエスは復活」していたので、お墓に有るはずの遺体は無かった。マリア達は考へて出来る限りのことを行なおうとした。そのことは出来なかったが、結果的に「神の栄光の御業の一端に触れること」が出来た、と若林牧師は私達に教へて下さった。

なお、「不可能の可能性」という言葉はドイツの神学者カール・バルトの著述に依るとのこと。

若林牧師は、「クリスチャンはすでに救われている」のであるから、「隣人のために『考へて行動す

る』ように」、と勧められ、キリスト者の生き方は「あきらめないで、出来る限りのことをする」事であり、「可能性を信じる」事の大切さを強調して下さった。ありがとうございました。

（2011年11月22日）

参考：【引用聖句】

キーワード：アリマタヤのヨセフ

○マタイによる福音書 27; 57 夕方になって、アリマタヤの金持ちでヨセフという人が来た。彼もイエスの弟子になっていた。

○マルコによる福音書 15; 43 アリマタヤのヨセフは、思い切ってピラトのところに行き、イエスのからだの下げ渡しを願った。ヨセフは有力な議員であり、みずからも神の国を待ち望んでいた人であった。

○ルカによる福音書 23; 51 この人は議員たちの計画や行動には同意しなかった。彼は、アリマタヤというユダヤ人の町の人で、神の国を待ち望んでいた。

○ヨハネによる福音書 19; 38 そのあとで、イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取りかたづけたいとピラトに願った。それで、ピラトは許可を与えた。そこで彼は来て、イエスのからだを取り降ろした。



日野原重明先生との出会いに感謝して

及川 忠人

2012年6月24日(日)、岩手郡医師会が担当する第64回岩手県医師会総会がホテルメトロポリタン本館4階を中心に開催され、その特別講演講師として聖路加国際病院理事長の日野原重明先生をお招きすることができた。その総会が、盛会裏に終了したのを機に、日野原重明先生との出会いやこれまでの長い交流を振り返り、その経過を書き留めることとした。

小生が岩手医科大学医学進学課程に入学したのは1965年(昭和40年)4月のことであった。医学進学課程2年の2月上旬に、北海道日高地区において、キリスト者医科連盟北海道部会主催の地域医療奉仕活動が行われ、小生もそれに参加した。荒廃した村落を訪問しながら診療奉仕をするというプロ

グラムで、その時のミーティングにおいて、初めて当時50代中頃であった日野原重明先生とお目にかかった。先生がお話しされたことの詳しい内容は記憶に薄れるが、その中で、先生は、「我々の国籍は天にある(フィリピの信徒への手紙3章20節)」という聖句を引用されてキリスト者医師の使命について説き明かして下さった。それ以来、学生時代を通じて何度か日野原重明先生の講演を拝聴することが出来た。

その後、小生が東八幡平病院に赴任した後の1987年に、八幡平においてキリスト者医科連盟の総会が開催されることになり、当時の連盟会長であった伊崎理事長を中心に準備を進める中で、日野原重明先生を特別講演講師としてお迎えすることになった。

ところが、その時は、先生が思いがけず急に体調を崩されて、おいでいただくことができなくなりました。丁度、『医学と福音』誌に先生の講演録が掲載されていた時期で、それを拝見し、とても楽しみにしていただけに、大変残念な思いであった。

それから13年を経た2000年10月初旬、たまたま「リハビリテーションケア合同研究大会」が盛岡で開催されることになり、その責任者として、久しぶりに日野原重明先生を特別講演講師としてお招きすることになった。当時、先生は『葉っぱのフレディに学ぶ』という著書を刊行され、レオ・バスカリアの唯一の童話を少しでも多くの人々に知ってもらいたいと、精力的に活動されている時期であった。小生にもその著書をくださったことから、そのお礼として、オー・ヘンリーの短編集に収録されている小品『一枚の枯葉』の英訳版をお送りすることにした。そうしたところ、日野原先生は、わざわざ小生にお礼の電話をくださり、その作品のことは知らなかったが大変感銘を受けたと望外に喜んでくださった。そのときの先生のご様子が大変印象的で、いつまでも失われることのない好奇心と探究心にあらためて感心させられる思いであった。

そして2年前の9月、たまたま岩手県医師会会長職を務めていた関係から、できればもう一度、岩手県医師会総会の特別講演者として、先生をお招き出来ないものかと考え、直接、ご依頼申し上げてみた。すると、先生は、2年後の6月であれば、大丈夫かもしれないと言われ、秘書である山本さんと連絡をとるようにご指示くださった。次の年の10月には100歳の誕生日を迎えられる予定で、その前後、2年間ほどは、講演や催し等で日程が埋め尽くされている状態だったのである。当初は、八幡平にて岩手県医師会総会を開催する計画であったが、高齢となられた先生をお招きするためには、緊急時の対応態勢を整えておくことが不可欠ということになり、総会会場を盛岡市内に変更するとともに、岩手医大救急科にもあらかじめ協力を求めておくことで、辛うじて聖路加国際病院理事会の了解を得ることが出来た。

実は、小生としては、医師会総会で先生に御講演いただいた後、もし可能であれば内丸教会にもお出で頂き、信仰の証をしていただくことはできないものかと期待し、ぎりぎりの時期まで模索していた。しかし、100歳を越えられている先生に、沢山のスケジュールを重ねさせることは避けた方が良くとの意見が相次ぎ、その構想については断念せざるを得なくなりました。

そのような経緯を経て、今回、とりあえずは、岩手県医師会総会の記念講演会が実現することになった。先生からは、事前に「医師会に望むこと―看護師・訪問看護師との協力について―」という演題を頂いていた。1年に100回以上もの講演をこなし、年数回は海外旅行もされるという超多忙な先生だけに、講演内容のレジメを頂くことまでは無理であろうと考えていたのであるが、講演会の約1週間前には、思いがけず、メールでレジメをいただくこともできた。講演会当日、先生は、約70分間、終始ご起立のまま、ゆっくりとした口調で、ところどころにユーモアを交えてお話しされた。しかも、これまでの医療を歴史的にふりかえる中でチーム学習に関する最先端の話題(TBL: Team based Learning)を紹介するものであり、とても100歳の先生のものとは思えない高度な内容のご講演であった。先生のご講演は、参加した多くの医師会員に深い感銘を与えることとなったが、小生としても、先生の深い学識やご経験、100歳になられてもお豊饒として前向きに進んで歩まれるお姿に触れ、あらためて感動を覚えた。

先生は、講演会終了後の交流会や叙勲表彰祝賀会にも参加され、殊に、宮沢賢治の詩の朗読を織り交ぜたマリンバの演奏を堪能しておられた。日本音楽療法学会の理事長をなさっていることもあって、その朗読と演奏を喜んでくださったのであろう。

先生は、毎週、朝日新聞に100歳の証「あるがままに行く」というエッセイを寄稿されているが、今回の盛岡旅行の電車の車中でもエッセイをお書きになっていたようである。その原稿を日野原真紀さんから見せていただき、先生の行動力やバイタリティーに驚くとともに敬服の念を覚えた。

これまで記してきたように、日本各地で多くの人々に希望を与えつつ歩んでこられた日野原重明先生と、折に触れて、身近に接することが許されたことは、ひとえに神様の恩寵によるものであると感じている。NHK出版から発行されている「日野原重明100歳」という著作があるが、その中で先生は、自分の奥様と自分自身の死について触れられていて、その時の自分の対応や行動には自信がないことを正直に告白されている。先生の生身の人間としての姿が現れている部分であり、誠に親しみを禁じ得ない。小生が医師として目標にしてきた先生とのかけがえのない出会いに心から感謝し、少しでも先生の信仰とその生き方に学ぶ努力を続けていきたいと願っている。(2012-06-30)



シリーズ 『礼拝出席者の素顔』

『教会が大好き!』 ～小畑義宣さん(よっちゃん)に聴く～

(教会来会者シリーズ3)

6月24日の礼拝後、小畑義宣さん(以下、「義宣くん」と表記)にインタビューすることになりました。おかあさんの小畑孝子さんにも同席をお願いし、講壇脇の準備室に義宣くんを招き入れました。ただ、義宣くんは、少しそわそわしていて、何やら心配そうにおかあさんの孝子さんの顔をうかがっています。それに対して、孝子さんが「魚住さんが義宣とお話したいんだって。短い時間だから大丈夫よ。」ととりなしてくださり、いよいよインタビューがスタートしました。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

聞き手： 義宣くん。急いでいるところをごめんなさいね。そういえば、義宣くんは、いつも礼拝後、ひとりでレストランなどにお食事に行くことを楽しみにしているんだよね。きょうもお出かけするのかな。

義宣くん： はい。出かけます。

聞き手： ごめんなさいね。15分くらいで終わるので、少しお話しさせてね。まず、義宣くんは、いくつになったんだったかな。

義宣くん： 今度、お誕生日がくると、52歳になります。

聞き手： ということは、今は、51歳ね。お誕生日はいつ。

義宣くん： 11月26日です。

聞き手： 義宣くんといえば、教会が大好きで、小さい頃からおかあさんと一緒に欠かさずに礼拝に来ているよね。

義宣くん： 来ています。

聞き手： 子どもの頃の教会のことで、何か覚えていることはあるかな。

義宣くん： ……。

小畑孝子： 子どものころのことだって。ほら、工藤さんたちや梶原さんたちにいろいろなことを教えてもらったでしょう。

義宣くん： いろいろなことを教えてもらいました。クリスマスも楽しかったし、分級でお散歩しました。

聞き手： 今でも礼拝には、毎週来ているけど、教会は、どんなところが好きなの。

義宣くん： ……。

小畑孝子： ほら、好きなことがあるでしょう。讃美歌を歌ったり…。

義宣くん： 讃美歌を歌ったりすることです。…あと、いろんな人とごあいさつすることです。

聞き手： たしかに、義宣くんは、教会にきた人たち一人一人にいていねいにごあいさつしてくれるよね。教会に来ている人、全員の名前や顔を覚えているの。

義宣くん： 覚えています。

聞き手： そういえば、義宣くんとは、街の中や駅のお店の中でも出くわすことがあるよね。たいてい、義宣くんのほうがみつめてくれて、笑顔でごあいさつしてくれるんだよね。

義宣くん： ごあいさつします。

聞き手： 「また、次の礼拝でお目にかかりましょう。」なんて、とてもいねいな言葉で声をかけてくれるんだよね。わたしのほかにも街の中で、教会の人と会うことがあると思うけど、そのようなときはうれしい?

義宣くん： うれしいです。…カワトクアネックスで会ったとき、お話しできなかったけど、次に生協で会ったときにごあいさつできました。

聞き手： ?

小畑孝子： ああ、それは、梶原さんのことです。義宣は、梶原さんのことが大好きなんです。

義宣くん： 好きです。

聞き手： ああ、そうだったの。…あと、義宣くんは、日曜日の礼拝だけではなく、水曜日の祈禱会にも毎週お母さんと一緒に出席しているんだよね。

義宣くん： 祈禱会に出ています。

聞き手： 祈禱会は楽しいの?

義宣くん： 楽しいです。

聞き手： どんなところが楽しいの?

義宣くん： 聖書を読むことです。

小畑孝子： 聖書の輪読で、義宣に順番が回ってくると、まず、中原先生がその箇所をゆっくり読んでくださり、義宣が同じように繰り返すのです。義宣は、それがとっても

うれしいのよね。

義宣くん：うれしいです。中原先生と一緒に読みます。

聞き手：あと、義宣くんと言えば、なんと言っても絵が得意で、そのことを皆さんに紹介する必要があるね。義宣くんは、絵が好き？

義宣くん：好きです。

聞き手：前に、義宣くんの家におじゃましたとき、たくさんの絵を見せてもらったことがあるけど、子どものころからずっと描いているの？

義宣くん：子どものときから描いています。

聞き手：どんな絵を描くことが多いの？

義宣くん：村上さんの車を描いたり、梶原さんの顔を描いたりします。あと、まなちゃん(梶原夫妻の長女)を描いたこともあります。

聞き手：義宣くんは、車や人の顔、花など、何でも描くんだね。特に、乗り物の絵は得意なようだけど。

義宣くん：バスとか電車を描きます。

聞き手：義宣くんが絵を描くときには、その場で見て描くことが多いの。それともおうちに帰ってから思い出して描くことが多いの。

義宣くん：……。

小畑孝子：ほとんど、家に帰ってから思い出して描くのよね。

義宣くん：思い出して描きます。県交通のバスのガラス窓とか……。

聞き手：ものの形や細かい部分を正確に覚えていて、それを几帳面に絵に再現するんだよね。義宣くんの絵は素敵だよ。

義宣くん：はい。

聞き手：最後になるけど、義宣くんは、毎週礼拝後、どんなお店でお食事しているの。

義宣くん：「大阪王将」とかパルクにある「フウバオ」とか「やぶや」に行きます。

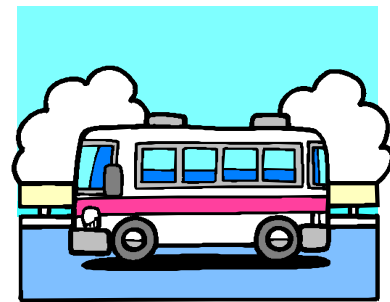
聞き手：よく行く店は、店員さんとも顔見知りになっているのかな。

義宣くん：知っています。

聞き手：きょうは、お話ししてくれてどうもありがとう。早くレストランに行きたかったのに引き留めてごめんなさいね。これからも元気に教会に来て、皆さんに声をかけてくださいね。

義宣くん：はい。わかりました。

(聞き手：魚住英昭)



2012 年度教団新生会大会に参加して

神谷一夫

新生会の大会は、2012年6月22日(金)17時から始まり23日(土)の15時まで行われた。会場は神戸市中央区生田町にある神戸聖愛教会の会堂であった。

神戸聖愛教会は明治15年(1882年)にアメリカ人の宣教師リースがバプテスト派教師として伝道を開始したのが元とされている。内丸教会の創立の2年後である。現在の聖堂は1992年に竣工されたもので、尖塔に十字架の付いたロマネスク様式の建築物である。塔の高さは、周りの13-15階のビルに挟まれてはいるが、それらと肩を並べており、30メートルから40メートルの高さではないか。塔は異彩を放っており、新幹線新神戸駅

から200メートルの距離に位置し、ホームからもその威容がうかがえる。

大会の参加者は、教団新生会に属する23教会の内18教会から、総数123名が参加した。

内丸教会からは、中原牧師と神谷が参加した。今回の大会のテーマは「希望と連帯」一顔の見えるまじわりをめざして一であり、このテーマのもとに、新生釜石教会の信徒の方々、城崎教会の信徒、仙台北三番丁教会の信徒から発題がなされ、これらをもとに、10組のグループに分かれ、それぞれ10名ぐらいの少人数による自由な話し合いがもたれた。

私の属したグループは9組であり、男性4名、

女性6名のグループであった。各自順番に、自己紹介、東日本大震災について、新生会に関して、意見、感想を述べあった。震災に関しては、どの方も、献金をされたり、直接現地においてボランティアで奉仕をされたり、それぞれの置かれた立場で支援を行っておられた様子うかがわれた。神戸も17年前に阪神淡路大震災を受けており、他人ごとではないという様子うかがわれた。

新生会の繋がりに関しては、バプテストの伝統を維持していくために必要だという意見から、当初の使命を果たしたので、新生会を終わりにしてはという意見まで幅広い考えが出された。そもそも、新生会が教団の中に組織されたのは、バプテストの伝統を守るため、バプテスト派の繋がり強化にあったようである。当初の目的が果たされたのか、あるいは目的が達成されたのかどうかは分からないが、バプテストの伝統の現在における意味役割を再検討することも必要であろう。また、「絆」という言葉が頻繁に用いられていたが、「絆」が結ばれておれば、多分その言葉は、表にでてこないものであろう。何を守り、何を強めていかなくてはならないことは皆も分かっていたことと思われる。それでもあえて、新生会不要論が出されたのは、今、その必要性が根本から問われていることの表れでもあるのではないか。

午後からの全体会議において、新生釜石教会の柳谷牧師が言われていたが、強い「絆」ではなく、関係の「ゆるい」繋がりは今求められているのかもしれない。強いつながりは、繋がりあっている

同士は強く結ばれているが、強ければ強いほど、そこに縛りが生じてくる。また、「絆」という言葉の元の意味が、逃げないようにしぼりつけるということにあるように、かえってそれぞれの自由な行動、自由な考え方をしぼりつけ、一方向のみコントロールされていく危険性が生じる。

新生会大会では、様々な意見が出され、今その伝統とは何か、現在何のために伝統が守られなければならないのかの、根本的な議論が必要な時期にあるように感じた。大会を通じてかなり真摯な議論が行われたが、2年後の大会は姫路教会が中心と成って行くことが決定された。2日間と言う短い時間ではあったが、聖愛教会の婦人がたのご奉仕によって、大会が維持されスムーズに進行していくことが出来たことに、感謝を捧げたい。なお、内丸教会が無牧の時代に、代務者として約2年間教会を支えてくださった、小栗義忠牧師がお元気なお姿でおいでになっておられた。感謝とお礼を申し上げた。



— 中原牧師のブレイクタイム —

七夕に思うこと



牧師 中原 眞澄

七夕……という、皆さんも小さい頃、小さな願い事を書き付けた短冊を竹の枝にくくりつけ、軒先においた記憶があるのではないのでしょうか。私の家も、両親ともクリスチャンでしたが、そうした年中行事を大切にしていたので、思い出に事欠きません（多分、母は子どもと一緒に飾り付け、歌を唱ったりする事が自分も楽しかったから……と思うのですが）。四季それぞれがくっきりした日本の風土には、こうした行事がよく似合い、その時々の湿度や風、空の色具合等と共に記憶に刻み込まれ、家族や自然への様々な感覚（共感）を養っていくように

思います。それに加え、牽牛・織り姫といった伝説を聞くと、ほのかな憧れや哀しみが心に染み込んで、人間関係の土壌を豊かにしてくれたように思います。

こうした日本の文化的な風習を、異教的な習慣だから……と排斥する傾向が、キリスト教に（特にピューリタンの潔癖感の強い宣教師によって）持ち込まれたこともありました。けれども考えてみれば、私たちがキリスト教の年中行事と思っている多くは、クリスマスやハロウィンを始め、広く伝道されるにつれてそれぞれの土地で信じられ・行われてい

た古くからの宗教行事を取り込んだものです。伝説上の聖人たちの多くも実は元来は異教の神々で、キリスト教の聖人にすることで伝道を容易にしようと教会が努力した結果なのです。

遡っていえば、ユダヤ教伝統の行事、例えば過越祭や除酵祭（種入れぬパンの祭）なども、礼拝メッセージで何回か語ったように、ユダヤ教以前の遊牧民や農民の祭を取り入れ、ユダヤ教化したものです。

ですから、何が「純粹」で、何が異教的で「不純」なものか等の区分けは、それ自体が無意味なのです。問題は、行われる行事にどのような思いや願いが籠められ、その結果として何がもたらされるのか・・・ということでしょう。

「悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結

ぶ悪い木はない。木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる」（ルカによる福音書6章43～44節）とイエス様は語られましたが、何をもって良い実とし、何をもって悪い実とするのか、私たちは外見や衣だけで判断するのではなく、何が心の内にもたらされるのか、その事に目をとめたいと思います。そういう意味では、私たちは実に豊かな行事や習慣を祖先から伝えられてきたと思います。その豊かさを捨て去るのではなく、かつてヨーロッパやアメリカ大陸に宣教したブラザー達の苦勞を偲びつつ、私たちも、七夕はじめ日本の伝承を活かし、そこに籠められた願いや祈りを受け止めていきたいと願うのです（多分、かたちになっていくには何百年とかかるのでしょうが……）。

あとがき

大震災後の被害回復も遅々として進まない中、異常気象の影響により各地で災害が相次いでいます。政治的な喧騒も止まない中、今年もまた猛暑の夏を迎えようとしています。さて、このたび、ようやく、季刊うちまる4号を皆様のお手元にお届けできることとなりました。今回は、取材の遅れなどもあって、前号発刊から多少間が空いてしまいました。それでも教会員から自発的なご寄稿をいただいたり、快くインタビューに応じていただいたりするなど多大なご協力をいただきました。8月には、教会修養会等も予定されていることから、次号に掲載する原稿も早晚集まるのではないかと期待しています。今後も様々な特集を組むなどして発刊を継続していきたいと思っておりますのでよろしくご協力願います。

当教会関係者の皆様及び本誌に目を通していただくであろう諸教会の皆様の上に、主の導きが豊かにありますように。
(2012. 7. 15 魚住)



「季報うちまる」編集委員：魚住英昭，神谷一夫
〒020-0021 盛岡市中央通一丁目6-44
TEL(622)6688 FAX(622)2565
日本基督教団 内丸教会 牧師 中原真澄